第1章
序章

1.1 はじめに

グローバル化の進む昨今では、誰でも簡単に海外の情報にアクセスすることができるようになった。そんな中、日本の音楽やアニメ、マンガなどが世界的な人気を博しており、インターネットでこれらを目にすることも容易となった。最新の国際交流基金による「海外日本語教育機関調査」（2015）における学習者数に関する調査によると、前回の 2012 年度の調査より若干減少しているものの、世界中で 3,651,715 人（2015 年度調査）もの日本語学習者がいることが分かった。現在筆者が滞在しているインドネシアでは、中等教育機関での教育課程カリキュラムが改定されたこともあり、全体的な日本語学習者数は減少したが、それに対し高等教育機関では、日本への文化的な関心などから前回の調査に比べて 25%以上の学習者数の増加が見られている（国際交流基金 2015）。また、インドネシア人が日本へ旅行に行く際に以前は取得すべきであったビザも、15 日以内での観光や知人訪問目的などであればビザ免除登録ができるようになった（外務省 2014）。それに伴い、近年日本への観光客の数が大幅に増えてきているのが現状である。これらのことから、インドネシア人にとって、日本語に触れる機会が少しずつ増加していると感じられる。従って日本語学習をよりスムーズに、また効果的に行えるようにするための研究の必要性も高まってきている。

1.2 研究目的と意義

筆者は過去にインドネシアにおいて日本語を指導した経験があり、インドネシア人日本語学習者は、全体的に高いモチベーションを持って学習していると感じている。しかし、指導していく中で彼らが時々犯すミスが気

になってきた。それは特に作文などでの書くアウトプットでしばしば見られた、時を表す日本語の「今」、「今日」、「今回」、「今から」、「今まで」という語の使い方に関する誤用であった。

筆者がこの研究テーマを選んだ理由は、インドネシアでの日本語教授経験において、インドネシア人学習者の今」、「今日」、「今回」、「今から」、「今まで」という時を表す語の使い方に、違和感を覚えることがしばしばあったためである。筆者が日本語指導時に実施した作文の宿題などで、学習者の作成した文において本来「今」を使うところを「今日」としたり、また反対に「今日」とすべきところを「今」とするなどの誤用が見られた。同様に「今回」とすべきところを「今」を使用した誤用もあった。さらに、「今から」を使うとより自然な日本語になるところで「今」を使用したり、「今まで」という語の使い方にも誤りが見られた。以下に、筆者が作文の宿題や会話の授業で収集した、インドネシア教育大学 3 年生のいくつかの誤用例を紹介したい。（　）内は筆者が訂正した正しい日本語の文である。

1. 今の午後 4 時にきっさてんでイマと一緒に行った。

   （今日の午後 4 時にきっさてんへイマと一緒に行った。）

2. 高校生の時に比べて、今日は私は大人の人になり、我慢強い人になった。

   （高校生の時に比べて、今は私は大人になり、我慢強くなった。）

3. （イベントは）大変ですけれども、楽しいと思います。ですから、今、私は委員会になりました。

   （ですから、今回、私は委員会になりました。）

4. ※今、まさに発表しようとする直前で

私は今、「学習者のニーズ」について発表したいと思います。

（私は今から「学習者のニーズ」について発表したい思います。）

5. 私は今まで学生です。

（私は今学生です。）

これらの誤用例から、筆者はインドネシア人日本語学習者における「今」「今日」、「今回」、「今から」、「今まで」の使い方に関して興味を覚え、研究していきたいと考えた。

また誤用分析という方法を選んだ理由は、学習者数の中で、どのような誤用パターンが見られるのか、全体の何％の学習者が間違えているのか、レベル別で誤用の影響はあるのかなどを、視覚的に分かりやすい数字のデータとして出し、分析したかったためである。

以上に基づき、筆者が本論文で明らかにしたいことは次の３つである。

1. 学習者の誤用には、パターンがあるのか

それはどの様なパターンなのか

2. 誤用の原因は何か

3. 誤用を減らすにはどうすればいいか

筆者は「今」と「今日」に関する誤用の原因は、インドネシア語の言語転移（Language Transfer）が影響しているためであるという仮説を立て、この仮説を分析していくことにより証明したいと考える。従って本研究の目的は、インドネシア人日本語学習者における「今」、「今日」、「今か

ら」、「今まで」の日本語の使用に加え、”sekarang”や”hari ini”というインドネシア語の意味や使用法も含め、誤用の原因や傾向を母語転移の観点からも分析し、明らかになった原因や結果を踏まえ、今後の日本語教育に貢献することである。本研究を行うことにより、上記の誤用に関する誤用が減少していくようになれば嬉しく思う。

1.3 本論文の構成

本論文では、インドネシア人日本語学習者における時を表す語の誤用に関する分析を行う。本論文の構成は、以下のようになっている。

第二章では、先行研究と基礎的理論に関して述べる。ここでは誤用分析と言語転移（母語転移）に関して述べる。さらに本研究での研究対象となる語である「今」、「今日」、「今日（こんにち）」、「今回」、「今から」、「今まで」の持つ意味範囲とその使用例を述べる。同様にこれらの語に相当するインドネシア語”sekarang”と”hari ini”、英語の”now”と”today”に関する意味と、インドネシア人日本語学習者の「今」や「今日」などを使った誤用文も併せて紹介する。

そして第三章では、本研究の研究方法に関して述べる。

続いて第四章では、筆者が実施した予備調査と本調査で使用したアンケート質問紙と、それにより得たデータと分析結果に関して述べる。

最後に最終章では、第四章で明らかになった誤用の原因や傾向、パターン、そして結果を踏まえた上で、今後の課題としてどのようにすれば学習者の誤用が減少されるかという対策と提案をしている。またさらには、本研究で残された課題に関して述べ、本論文の結びとなっている。